

韻律の観点から見た日本語談話標識 「でも」の使用

陳 相州

キーワード 日本語談話標識「でも」、韻律的特徴、ピッチレンジ、持続時間長、談話機能

1. はじめに

文字言語と異なり、音声によるコミュニケーションが伝達する情報には言語情報のほかに、パラ言語情報と非言語情報が含まれている。聞き手は伝えられた言語情報と、発話意図、心的態度、感情といったパラ言語・非言語情報を総合的に判断し、話し手が伝えようとする内容を解釈する。言語情報とパラ言語・非言語情報の中の1つに伝達ミスがあれば、ディスコミュニケーションが生じかねないと言われている。前川(1998)はこれらの中でパラ言語情報の伝達には音声の韻律的特徴が大切な役割を果たしていると説明している。

and, but, soなど従来の研究で接続詞として扱われるものは、文をつなぐ接続機能のほかに、ディスコースレベルで談話の単位を区切る機能を持つため、会話を分析対象とする研究では談話標識(discourse markers)と呼ばれている(Schiffrin 1987)。Fraser(1996:168)は談話標識について、“the linguistically encoded clues which signal the speaker's potential communicative intentions(話し手の潜在的発話意図を示す言語コード)”と述べている。Fraser(1996)の説明からわかるように、談話標識の使用はパラ言語情報の伝達に深く関わっているが、談話標識を使用する際の韻律的特徴に着目した考察は今だ少ないようである。

本研究では、日常会話で多く使用されている日本語談話標識「でも」(国立国語研究所1955、岩澤1985など)に焦点を当て、日本語談話標識「でも」を使用する際の音声的実現を明らかにしながら、その談話機能を究明することを目的とする。なお、日本語談話標識の中で特に「でも」を研究対象として選んだのは、先行発話に反する内容を提示する本質的な機能を持ち、会話参与者間の人間関係にマイナス効果をもたらす恐れのある「でも」の方が他の談話標識より

その韻律的特徴のメカニズムを解明する緊急性が高いと判断したためである。

2. 研究の手続き

2. 1. 分類

岩澤（1985）は日本語逆接接続詞について、論説文、会話文、随筆文といった文体の異なった資料から集めてきたデータを分析し、日本語逆接接続詞の会話使用には逆接以外に、対比、展開、転換の用法が見られると結論付けている。一方、会話における「でも」の使用を考察しているクワンチャイ（1999）は岩澤（1985）と同様に、「でも」の用法に逆接、対比、展開、転換があると述べている。以下は、この4つの用法に対する岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）の説明をまとめたものである。

①逆接：「Aである。Aでない」という形をとるものである。Aと否Aの逆接関係を間接的に成立させる例が多い。

例1 「モア」という絵の展覧会に行く曜日の話

N まだやっている けっこう長くやってるね

I 6月何日までだからね

N もうそろそろか

I あ じゃ もうそろそろか

N もうそろそろだよ

I (笑) もう6月だもんね

N じゃ 月曜に あ でも 月曜に行けないんだなあ

(クワンチャイ、1999:29)

②対比：特にAと否Aの対立を強調する用法である。

例2 ホームステイ先の話

I こっから違うの こっからがねえ あたしのい (A うん) ホストファミリーがあつて (A うん) こっからのそのステファン家があるんだけど (A うん) こっからこっちの家ってみんなでっかいのね (A ああああ) でも こっからこっちは小さい家ばかりなのよー (A (笑)) だからその ステファン家もそうだしー (A うん)

(クワンチャイ、1999:35)

③展開：明確な否Aを対立させることができないものである。

例3 Sはつぶらな瞳とはどんな瞳か気になっているという話

S うん なんかもほんとに一 うん (笑) なんて言ったらいいかわかんないって
いうの (H え?) いやなんて言ったらいいかわかんないけど (笑) う
ん まだすれていない

H ほー なるほど

S (?) な感じがするんだけど

H まあそうだよな でもなんかいったいどういう目のこと きっとそういう
のってあると思うんだよな どういう目

(クワンチャイ、1999：39)

④転換：前件と後件の間に逆接関係がなく、話題の一貫性がないものである。

例4 ゼミの発表の話→おなかがすいた話

T まさか 逃げ出すとかそういうわけではないと思ったので んーそれ
でー んーそしたらすぐ来ました んーんー

M あ でも おなかすいちゃったなー

(クワンチャイ、1999：40)

岩澤 (1985) とクワンチャイ (1999) の説明によれば、会話における「でも」の用法には、Aと否Aの関係をもつ逆接と対比の用法もあれば、否Aそのものが問題にならない展開と転換の用法もある。なお、Aというものについて、岩澤 (1985：49) は「一文であることもあるし、文章、段落、文脈、言語外現実であることもある」と説明している。

本研究では、「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係があるか否かということに注目し、Aと否Aの関係をもつ逆接と対比の用法を【Aと否Aの関係あり】の場合に属するものとし、否Aそのものが問題にならない展開と転換の用法を【Aと否Aの関係なし】の場合に属するものとする。

2. 2. 分析材料

日本語談話標識「でも」の音声的実現と談話機能を解明するにあたって、本研究は今現在、話し言葉データベースの中で質・量ともに最高水準と言われる前川他 (2005) 『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese: 以下、CSJと呼ぶ) を利用した。また、分析材料として使用したのはCSJに収録されている16組、計3.6時間の自由対話資料である。なお、本研究は研究目的に応じ、分析材料とする16組の文字資料を宇佐美 (2003) の文字化原則に従って整

え、発話文を基本単位とした研究用のデータベースを作成して使用する。

本研究では、分析に入る前に、CSJの16組から採集された137例の「でも」の使用状況を【Aと否Aの関係あり】の場合の逆接、対比と、【Aと否Aの関係なし】の場合の展開、転換に分類した。この「でも」の分類がどれだけ信頼性のあるものかを検討するために、セカンドコーダーを立ててカッパ係数 (Cohen's Kappa) を求めた。その結果、 $k=.734$ という実質的に一致していると思なされる高い数値が確認された。

3. 音響分析

日本語談話標識「でも」は1拍目にアクセント核がある頭高型の2拍語であるが、「でも」の韻律的特徴としてこの2拍の持続時間長と1・2拍目の間の下がり具合の2点に注目することにする。

本研究では「Praat」¹という音声分析ソフトを用い、「でも」の持続時間長とピッチレンジを観察する。「でも」の持続時間長は図1のように、音声波形とスペクトログラムを判断基準とし、「でも」の振幅が開始するところから、振幅が収束するところまでの時間を測定した。「でも」と後続発話との間に無音区間がない場合には、後続発話の始まりの単音までの区間を「でも」の持続時間として計測した。また、ピッチレンジは「でも」の1拍目から2拍目にかけての下降幅をセミトーン値 (st)²で測定した。

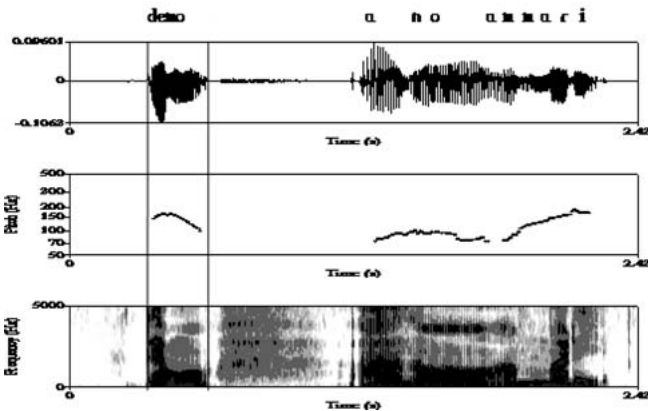


図1 「でも、あの一あんまり」の音声波形、F0曲線とスペクトログラム

3. 1. 持続時間長

持続時間長に影響を与える発話速度は基本的に個人毎に異なっているため、「でも」の各拍の実測の持続時間長をそのまま統計に使用することはできない。そこで、「でも」の各拍の発音持続時間長を比率に換算することにする。このようにすれば、同じ基準で比較することができると考えられる。図2に示したのは「でも」が各用法に使用された際の各拍の持続時間長の比率である。

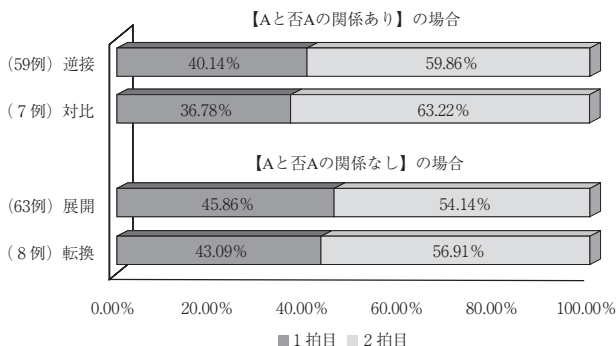


図2 用法別の「でも」各拍の持続時間長の変動

まず、【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に用いられた「でも」の長さには差異があるか否かを考察する。図2で示された【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に使用された「でも」各拍の持続時間長の差を、独立したサンプルの*t*検定 (Independent-Samples T Test) により検討した。その結果、「でも」の1拍目 [$t(135) = -2.706, p < .01^{**}$]、2拍目 [$t(135) = 2.706, p < .01^{**}$] となり、【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合における「でも」の1拍目「で」と2拍目「も」の持続時間長の差は有意であった。つまり、【Aと否Aの関係あり】の場合は【Aと否Aの関係なし】の場合より、「でも」の1拍目「で」の長さが有意に短く、2拍目「も」が有意に長いということが明らかになった。

次に、各場合の用法間に違いが見られるか否かについて、独立したサンプルの*t*検定で検証した。その結果は以下の通りである。【Aと否Aの関係あり】の場合における逆接と対比の両用法の1拍目「で」 [$t(64) = 0.705, p = .483, n.s.$] と2拍目「も」 [$t(64) = -0.705, p = .483, n.s.$] と、【Aと否Aの関係なし】の場合における展開と転換の両用法の1拍目「で」 [$t(69) = 0.565, p = .574, n.s.$] と2拍目「も」 [$t(69) = -0.565, p = .574, n.s.$] にはいずれも有意な差が見られず、

各場合の用法間に「でも」の長さの違いがあるとは言えない。

以上の考察内容からわかるように、「でも」の持続時間長の変動は「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係が存在するか否かということに大きく関わっている。

3. 2. ピッチレンジ

図3は各用法の「でも」のピッチレンジを示したものである。実線を引いたのは【Aと否Aの関係あり】の場合の用法であり、点線を引いたのは【Aと否Aの関係なし】の場合の用法である。

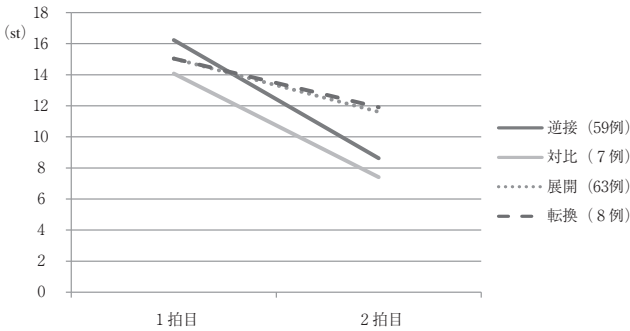


図3 用法別の「でも」1・2拍目のピッチ変動幅

前節と同様に、まず、図3で示された【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に使用した「でも」のピッチ変動の差を、独立したサンプルの*t*検定により検討した。その結果、【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に用いられる「でも」のピッチ変動の差は有意であった [$t(87, 129) = 7.188, p < .001^{***}$]。言い換えれば、「でも」のピッチレンジは【Aと否Aの関係あり】の場合の方が【Aと否Aの関係なし】の場合より広いことが判明した。

次に、各場合の用法間に「でも」のピッチ下降幅の差異が見られるか否かを独立したサンプルの*t*検定で検証した。【Aと否Aの関係あり】の場合の逆接と対比の両用法 [$t(64) = 0.540, p = .591, n.s.$] と、【Aと否Aの関係なし】の場合の展開と転換の両用法 [$t(69) = 0.415, p = .680, n.s.$] には有意な差が得られず、各場合の用法間に「でも」のピッチレンジの差があるとは言いがたい。

このことから、「でも」のピッチ下降幅に変化をもたらすのはやはり「でも」が

繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係があるか否かということであると結論づけられる。

3. 3. 考察

日本語談話標識「でも」の音声的実現について分析した結果をまとめると、次のようになる。日本語談話標識「でも」が【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に使用される際の持続時間長とピッチレンジという韻律的特徴は異なっているが、各場合の用法間には「でも」の音声的実現の差異が見られなかった。つまり、「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係が存在するか否かということは日本語談話標識「でも」の韻律的表現に大きな影響を与えていることがわかった。

「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係が存在する場合、すなわち【Aと否Aの関係あり】の場合には、「でも」の発音に1拍目「で」が短縮して最終拍「も」が長くなり、ピッチ変動幅が広くなるという特徴がある。一般的に最終拍の持続時間を長く延ばし、ピッチ変動を激しくすることにより、聞き手の注意を確実に喚起する可能性が高くなると思われる。【Aと否Aの関係あり】の場合はAと否Aの関係を示すものであるため、特に聞き手の注意を喚起する必要がある。従って、この場合における「でも」の最終拍「も」の延長とピッチの変動は、聞き手の注意を喚起して後続発話と先行発話との逆接・対比関係を強調する働きがあると考えられる。一方、【Aと否Aの関係なし】の場合はAと否Aの関係を示すものではなく、聞き手の注意を引き付ける必要性が【Aと否Aの関係あり】の場合より低いと思われる。そのため、【Aと否Aの関係あり】の場合のように「でも」の最終拍「も」の延長と1・2拍目の間の激しい下降幅という現象が見られなかった。

4. 日本語談話標識「でも」の談話機能に関する再考

本節では主に日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を根拠とし、日本語談話標識「でも」の談話機能を検討する。上述したように、日本語談話標識「でも」が【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に使用される際の持続時間長とピッチレンジという韻律的特徴は異なっている。本研究では、こうした「でも」の韻律的特徴を踏まえ、【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合に使用される「でも」の機能をそれぞれ対立予告と話題移行という機能に分類する。以下、この2つの談話機能について音響分析の結果を参照

しながら、それぞれの会話例を説明する。

4. 1. 対立予告

「でも」が対立予告の機能を果たすのは「でも」が連結する先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係がある場合であり、「でも」のもっとも典型的な使い方と考えられる。話し手はこの「でも」を用いて先行する情報に対して対立意見を予告する。

例5³

話者	発話内容
R:	うん、後は、あのー、いかにその人に気持ち良く話してもらえるか。
L:	うーん、どうしたら、うーん、いいんですか、<それは> < 。
R:	<あー> > どうでしょう、あんまり、こつはなくて、あのー、一番いいのは自分と合う方を探すしかないと思うんですね。
L:	うーん、 <u>でも</u> 職業柄そうも言ってられないじゃないですか？。

例5では、Rは営業がうまくなる秘訣について、プロの方にマニュアルを作ってもらい、気持ち良く話してもらうことであると語っている。それを聞いて、Lはプロの方に気持ち良く話してもらえる方法をRに尋ねたが、Rの返答に対してLは納得できないようで次のターン⁴で「でも」を用いて疑いを提出した。この例の「でも」はA（R：一番いいのは自分と合う方を探す）と否A（L：職業柄そうも言ってられないじゃないですか→自分と合う方を探すという方法はいけない）の対立関係を間接的に成立させたものである。図4はこの例で用いられた「でも」の音声的実現である。図4で示された通り、「でも」が対立予告という機能を果たす際には、1拍目「で」が短縮して2拍目「も」が長く伸びており、1・2拍目のピッチ下降幅が大きいということがわかった。

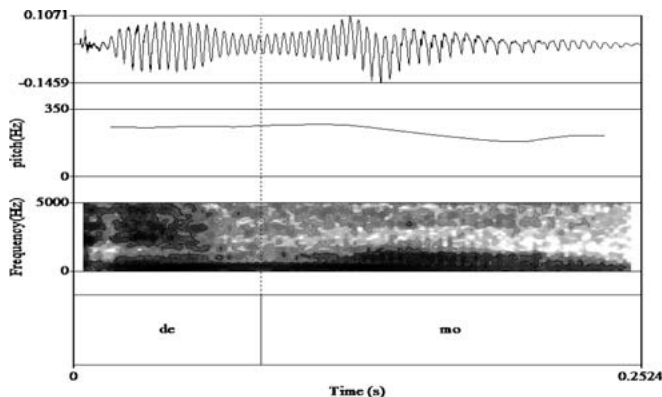


図4 例5の「でも」の音声波形、F0曲線とスペクトログラム

前述した通り、「でも」の対立予告の機能は先行する情報に対して対立意見を予告するものである。もしこの先行情報が聞き手の情報領域に属する場合には、基本的に聞き手のフェイス⁵を脅かす恐れが高い行為となる。しかしながら、実際に談話資料を考察すると、丁寧さ (politeness) を表すためにあえて「でも」を使用する用法も観察された。この丁寧さ表出の用法として、2種類のパターンが見られる。これらはそれぞれ、Leech (1983) の丁寧さの原則 (Maxims of politeness) のうちの是認原則 (Approbation Maxim) と謙遜原則 (Modesty Maxim) に関わるものである。是認原則と謙遜原則は話し手の発言が他者と自己についての何らかの良し悪しの評価を伝える度合いに関係している (Leech 1983)。

<是認原則の使用>

Leech (1983) によれば、是認原則とは他者の非難を最小とし、賞賛を最大とするものである。例6では、Lは自分の声質が嫌いである (A) と語っている。Rはそれに対して「でも」を用いた発話「でも全然そんなことないですよ」(否A)で、自分の声質が最悪だというLの主張を打ち消そうとした。Rの「でも」を用いた発話は丁寧さの原則からすると、是認原則に基づいたものであることが明らかである。

例 6

話者	発話内容
R:	あ、そうかテープ起こしとかする時に（うん） やっぱ自分の,,
L:	最悪くですね> < 。
R:	<声とか> > <笑いながら>。
L:	そこだけ早送りします<2人で笑い>。
L:	もう、（うーん） そうですよ。
R:	えー、 <u>でも</u> 全然そんなことないですよ。

<謙遜原則の使用>

謙遜原則とは自己への賞賛を最小とし、非難を最大とするものである (Leech 1983)。例 7 では、R の短大時代の専攻（心理学）と現在の専攻（法律）が全く異なっていることを聞いたあとで、L は R のことをほめている。L のほめ「凄いね」(A) に対し、R は「でも」を用いた発話「でも全然できないですよ」(否A) で否認し、自己を卑下した。この例の R の「でも」を用いた発話は謙遜原則に従ったものであると判断できる。

例 7

話者	発話内容
R:	でそんな時には心理学を、(あー) (あー) 専攻して,,
L:	へー。
R:	やってた。
L:	でまた今は??。
L:	今はですね、法律。
R:	えー、凄いね。
L:	え、 <u>でも</u> 全然できないですよ<笑いながら>。

例 6 と例 7 の「でも」の音声的実現については、例 5 と同じく図 4 のように「でも」のピッチレンジが広く、最終拍「も」が延長するという韻律的特徴が観察された。

4. 2. 話題移行

話題移行という機能は、A と否A の対立関係を示すものではなく、元的话题に

戻させたり、今の話題を更に発展させたりするために用いられるものである。

例 8

話者	発話内容
L:	はい、お願いします。
R:	はい、お願いします。
L:	ええ、でもそれはすいませんその延滞料金なんですけど、(ええ)最終的にその人達は返すつもりがないんですか<って<いう訳じゃなく> < 。
R:	<えー> > とですな、色んなパターンがあるんですな。

例8はインタビューが開始した直後の会話である。会話参与者双方が互いに挨拶をした後、Lはいきなり「でも」を用いて延滞料金の話に突入している。この「でも」を用いた発話(否A)は対応する先行発話(A)が存在しないため、Aと非Aの対立関係を構築するものではないことは明らかである。後の文脈からすれば、会話参与者双方がインタビューの前にすでにRの仕事について話を交わしたことがあると考えられる。インタビューがあることで、その話題が一旦中断しインタビューの始まりの挨拶に移った。挨拶が終わった後、Lは「でも」を用いて再びインタビュー前の元の話題に戻した。この場合に用いた「でも」の音声的実現を図5で示した。図5からわかるように、この例の「でも」については、ピッチ下降幅が狭くて「でも」の2拍の持続時間長にも際立った延長が見られなかった。

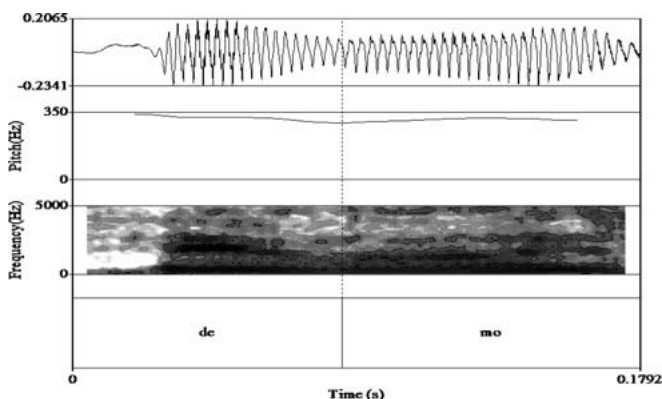


図5 例8の「でも」の音声波形、F0曲線とスペクトログラム

例8は話題を転換する例であるが、次の例9は「でも」が繋ぐ後続発話と先行発話との間に明確な逆接・対比がなく、単に時間の経過を追って今の話題をさらに発展させるものである。岩澤（1985）などの先行研究によると、この用法は「でも」の会話使用の中で最もよく使用される用法である。話題発展のための「でも」の使い方は話者の主張と感想を述べる際に多く観察され、またファイラー⁶と見なされるものも少なからず存在する。

例9

話者	発話内容
R:	だってあたし東京に来たばかりの時寂しかったですもん、何か喋ってもみんな反応してくれないし、(<笑>) 突っ込んで突っ込んでみたいよね <笑いながら>。
L:	<笑>。
R:	返事して、反応してって。
L:	<おかしいですね> < 。
R:	<デパートのお姉> > さんも冷たいし、(あー) みんな優しいですよ、関西の人は。
L:	<u>でも</u> そう思いました大阪行った時。
R:	でしょ。
L:	うーん。
R:	でしょ。
L:	後ね、町歩いててもエネルギーがある大阪の方が。

例9では、関西人であるRが上京した際の印象について語る会話である。この例でLが使用した「でも」はRの主張“関西人はみんな優しい”(A)に対し、否Aを立てると言うよりもむしろ同感の意を示し、今現在の話題の更なる発展に貢献したものと考えられる。以下の図6は例9の「でも」の音声の実現である。図6で示されるようにこの例の「でも」のF0曲線はほぼ平坦であり、「でも」の2拍もほぼ同じような長さで発音されているという韻律的特徴が見られた。

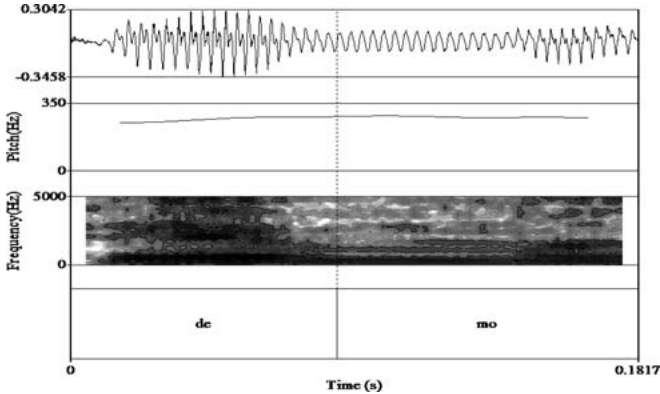


図6 例9の「でも」の音声波形、F0曲線とスペクトログラム

5. 「でも」の意味拡張に関する検討

上記では、日本語談話標識「でも」の対立予告と話題移行という2つの談話機能について、それぞれの会話例を挙げ、音響分析の結果と併せながら説明を行った。以下では、「でも」の意味拡張について詳しく説明する。岩澤(1985)が述べているように、「でも」のような逆接型接続詞は明確な論理関係の間でのみ使用されるわけではなく、主体的判断にまかされる面が多分にあるが、その部分がさらに増大し、逆接関係が曖昧化するにつれ、逆接性が薄くなって喪失してしまう。

日本語談話標識「でも」の対立予告という機能は、上述したように、「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの対立関係が成り立つものである。しかしながら、「でも」のAと否Aがはっきりと対立する例は岩澤(1985)が指摘しているように、実際には少なく、むしろ聞き手の判断と推論に頼り間接的に成り立たせることの方が多い。この聞き手の判断と推論の手掛かりは話し手が使用した「でも」の音声的实现であると考えられる。すなわち、話し手が使用した「でも」の音声的实现に長く延びる最終拍「も」の発音と激しいピッチレンジという韻律的特徴があるが故に、Aと否Aの対立関係を立てようとしているという話し手の意図を聞き手が的確に判断・推論することができると考えられる。

一方、日本語談話標識「でも」の話題移行という機能はAと否Aの対立関係が成り立たないものである。これは、岩澤(1985)が言うように逆接型接続詞の

逆接性が薄くなり喪失してしまう段階にあると考えられる。Aと否Aの対立関係を示すものではないため、聞き手の注意を引き付ける必要性もその分低いと思われる。従って、Aと否Aの対立関係を示す対立予告という機能のように、「でも」の持続時間長の変化とピッチの激しい変動といった傾向が見られなかったのである。

6. おわりに

日本語談話標識「でも」は頭高型アクセントの2拍語である。この「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係が存在するか否かによって、話し手が発する「でも」の2拍の長さやピッチレンジといった韻律的表現が変わってくるのが今回の考察を通して判明した。また、「でも」の韻律的特徴に基づき、「でも」の談話機能を対立予告と話題移行という2つの機能に分類できることも明らかになった。

文字表記上は同じ「でも」であるが間違った韻律的表現で発すると、聞き手に誤解されて不快にさせてしまうといったコミュニケーション上の摩擦が生じかねないと思われる。特に「でも」の使用は人間関係にマイナス効果をもたらす可能性が高いため、「でも」の韻律的表現の制御は外国人学習者に対する日本語音声指導において注意を要すべき項目と言ってもよいであろう。今後は日本語学習者が実会話で「でも」をいかに使用しているのか、またその際にはいかなる韻律的表現を伴っているのかについて詳しい分析を行っていきたい。

注

- 1 <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> ver. 5. 0. 38
- 2 F0の値 (Hz) をセミトーン値 (st) に換算する式は、 $\text{semitone} = 39.86 \times \log(F0 / 100)$ である。
- 3 文字化に用いた主な記号を以下で示す。□: 日本語表記の慣例に従う読点或いは短い間、○: 1発話文の終了、◻: 終了していない発話文、[? ?]: 半疑問文、< > |< |: 重ねられた方の発話、< > |> |: 重ねた方の発話、(): あいづち、▭: 長音。
- 4 話者交代の単位である。
- 5 Brown & Levinson (1987) によると、人間は「他者に邪魔されたくない欲

求」(negative face)と「他者に評価・好かれない欲求」(positive face)という2つの基本的な欲求がある。

- 6 フィラーとはこれまで日本語で声的感動詞、間投詞、言いよどみ、つなぎの語、遊び言葉、冗長語、間投声、ヘジテーション (hesitation) などさまざまな名で呼ばれてきた現象のことである (山根2002)。

参考文献

- 岩澤治美 (1985) 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56号 日本語教育学会 pp. 39-50.
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C(2)研究成果報告書 pp. 4-21.
- クワンチャイ・セークー (1999) 「会話における接続詞の「でも」について」『東京外国語大学日本論教育年報』3号 東京外国語大学日本課程 pp. 21-42.
- 国立国語研究所 (1955) 『談話語の実態』 国立国語研究所
- 前川喜久雄 (1998) 「音声学」『言語の科学2 音声』 岩波書店 pp. 1-52.
- 前川喜久雄他 (2005) 『日本語話し言葉コーパス』 国立国語研究所
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版
- Bakeman, R. & Gottman, M. J. 1986. *Observing Interaction: an Introduction to Sequential Analysis*. New York: Cambridge University Press
- Brown, P. & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: University Press.
- Fraser, B. 1996. Pragmatic Markers. *Pragmatics* 6-1. Amsterdam: North-Holland. 167-190.
- Leech, G. 1983. *Principles of pragmatics*. New York: Longman.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.